

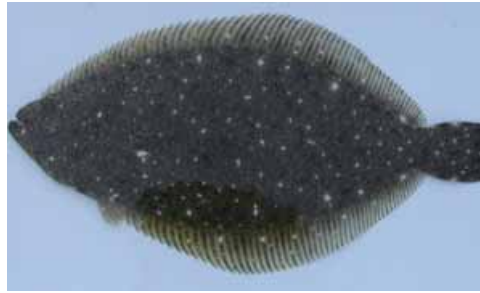
平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

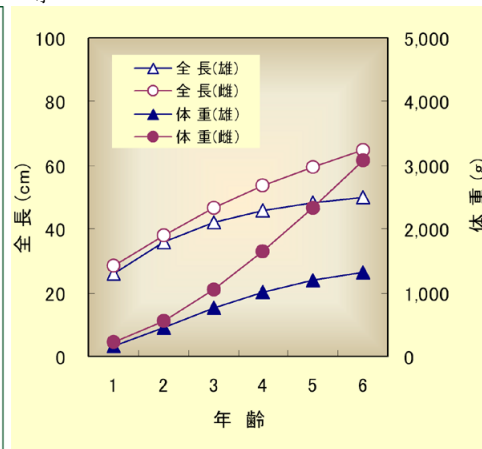
系群名 日本海北・中部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 15歳程度
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 春～夏季(3～7月)、水深50m以浅
索餌期・索餌場: 秋～冬季(8～3月)、水深150m以浅
食性: 着底後はアミ類など、全長10cm以上では魚類が主食、他にはイカ類、エビ類等
捕食者: 稚魚期にはより大型のヒラメをはじめマゴチ、オニオコゼ、アナハゼ、イシガニ、エビジャコ等

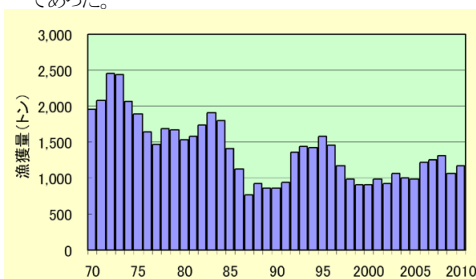


漁業の特徴

本種は沿岸漁業の重要な対象種で、栽培漁業の代表的対象種でもある。日本海沿岸の北～中部の各府県(青森県～兵庫県)で主に刺網、定置網、底びき網などで漁獲されている。

漁獲の動向

1970年以降における本系群の漁獲量は、10数年周期の増減を繰り返しながらも、全体としては減少傾向にある。近年の漁獲量は1995年をピークに減少に転じ、1998～2005年に1,000トン前後と低迷した。その後、2008年まで連続して増加し、1,310トンに達したが、2009年の漁獲量は1,068トンと急減した。2010年は前年を110トン上回る1,178トンであった。



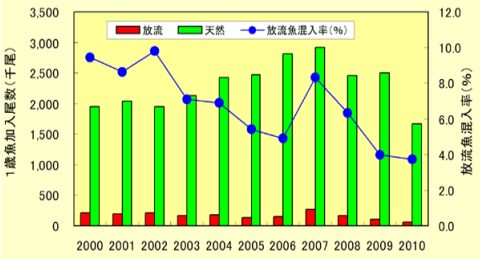
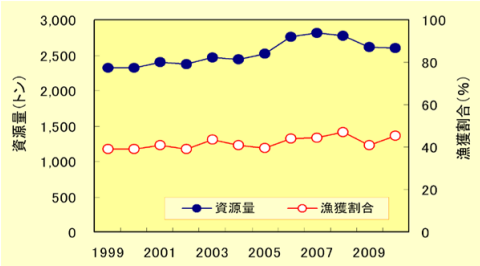
資源評価法

1999～2010年の年齢別漁獲尾数データを使用し、Popeの近似式(Pope 1972)によるコホート解析を行った。自然死亡係数は、安達(2007)に従い0.2とした。5歳以上をプラスグループとし、4歳魚と5歳以上魚の漁獲係数は等しいと仮定した。2010年の1～4歳魚の漁獲係数には各年齢の過去5年間(2005～2009年)の平均値を用いた。

資源状態

1999年以降の資源量は概ね2,300～2,800トンの間を比較的安定して推移しており、2009年以降は2,600トン台である。親魚量も1999年以降、1,600～1,800トンの間を比較的安定して推移している。一方、天然魚加入尾数は160万～290万尾の間を変動しており、明瞭な再生産関係は認められない。再生産成功率は、2006年以降減少傾向にある。1970年以降の漁獲量と1999年以降の資源量の推移から、資源水準は低位で、過去5年の資源動向は横ばいと判断した。





管理方策

資源水準の低位と中位の境界となっている資源量2,900トンを当面のBlimitとした。本系群の資源量はBlimitを下回る状態であり、低位水準にある資源の中位水準への回復が重要である。そこで、漁獲圧の低減によって5年後に資源量を緩やかに中位水準に回復させることを管理目標として、これを達成するF(Frec)をABClimitとしてABCを算定した。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	890トン	Frec	0.58	38%
ABCTarget	750トン	0.8Frec	0.46	32%

- ABCは10トン未満を四捨五入
- F値は2歳の漁獲係数
- 漁獲割合はABC／資源量

資源評価のまとめ

- 1999年以降の資源量と親魚量は、比較的安定して推移している
- 資源水準は低位、動向は横ばいである
- 加入資源の有効利用の観点からも、親魚資源の確保の観点からも、現状の漁獲圧は高いと判断される

管理方策のまとめ

- 資源量はBlimitを下回る状態であり、低位水準にある資源の中位水準への回復が重要である
- 漁獲圧の低減によって5年後に資源量を緩やかに中位水準に回復させることを管理目標とする
- 全長制限(現在25～30cm)効果の検証及び規制サイズの見直しや、適切な再放流方法の確立等が必要である

執筆者: 上原伸二・井関智明・八木佑太

資源評価は毎年更新されます。